

くのや。」

「カラクリやがな全で。家へ歸んで人に話も出来へんワ。花は能ふ咲いておましたか。へエ何や能ふ咲いてる様な香がしておました。そんな阿呆らしい事云われへん……………」

「八釜しい奴やなア。向ふへ着いたらお前等丈け上つて、思ふ丈け見て來たら宜えのや。サア酌いで呉れ……………」

チビリく〜と遣て居りましたが、何しろ船足の遅い家形で櫻の宮までと云ふと可なり時間が掛ります向ふへ着く時分には完全酔ふて仕舞ひよつた。

「ウイー。あゝ蒸しく〜するなア。もう一遍手拭絞てんか。ア、何や暑いと思ふたら、こんな處皆閉め切たアるのやな。誰が閉めたんや。」

「貴方が閉めエ〜と八釜敷い云ふて、閉めさしなはつたんやがナ。」

「何ば閉めエ云ふたかて、子供や有るまいし此様正直にキツチリ閉め切る奴が有るかい阿呆め。暑いワイ。開け〜……………」

船の連中も暑ふて堪らん。一遍風を入れ度いなアと、思ふてる處へ開け〜と來た物やさかい。心得たちウので一時に障字をガラ〜と開けますると、何しろ花は今が満開。一面に薄紅の霞が掛つた様に見えて御座ります、其處此處の木の根には毛絨を敷いて、ドロツクドンの散財をして居るかと思ふ

と、空に成た瓢箪振り廻してヒヨロ〜し乍ら、譯の解らん唄歌ふてる人が有ると云ふ、イヤもう陽氣な景色で御座ります。

「オイツ。せ、船頭。こ、こ、此處へ船着けたれ。さア皆。上つて花見て來い。ウイー。ひ、一人だけ残らな不可んぞ。酌ウ申し附けるチャツチャ。アハハハ」

「まア次さん。何だんねナ其様お酒ばつかり飲んで。貴方も一遍お上りやす……………」

「莫迦云え。ヒツ。船の中でさええ人に見られん様にしてるのや。こんな人混みの中へ往かれるかい」
「ア、次さん。良え事がおまつせ。まア繁八に任して見なはれ。それ扇子を斯ふ擴げて、お顔へ當てまんね」

「アツ。コラ。な、何しやがんね。」

「マア〜、じつと仕てなはれ。小蝶根はん、貴女の扱帯チヨット貸しなはれ。それ斯ふ云ふ具合に二つ卷いたら、後ろでグツと結んで垂らしときます。ナア是れなら誰にも顔は解らしまへんやろ」

「まア良え恰好やワ。序に着物も脱いで襦袢一つになりなはれ。サア帯ほどいたげまよ」

「コレ〜。無茶すなく〜。」

「早ふ脱ぎなはれ。」

「不可んと云ふのに……………」